

Title	大学は図書館と共に
Author(s)	長尾, 真
Citation	静脩 (1999), 臨時増刊号(1999)100周年記念: 1-2
Issue Date	1999-11
URL	http://hdl.handle.net/2433/37835
Right	
Type	Article
Textversion	publisher



The Kyoto University Library Bulletin

静脩

1999年11月

附属図書館
創立100周年記念
臨時増刊号

大学は図書館と共に

京都大学総長 長尾 真

京都大学の図書館は560万冊余を持つ全国有数の図書館であり、国宝や重要文化財の指定を受けた文書を含み、多数の古文書を持つなど多くの特徴をもつ図書館である。ただ我々の誇りとするこの図書館にも以下に述べるような種々の課題が存在する。

たとえば、図書館は60余りの図書室に分散されていて、それぞれの図書室では独特の分類方式をとっている。したがって他部局の図書の利用はかならずしも便利に出来るわけではない。

京都大学全体として図書に使われる金額はかなりの額であり、年間に約9万冊を購入しているが、中央図書館である附属図書館では定期的に購入することが指定されている図書・雑誌を除いて、毎年自由に選書して購入できるのはたったの3000冊程度である。まことに寒々とした気持ちにさせられる数字である。

そもそも大学図書館は研究者向けの研究図書館と、学生の勉強のための学習図書館をもうけ、それぞれの目的にそった書物を体系的に購入し、提供すべきものである。研究用の図書館は各専門分野ごとに作られるのが自然であるという点からは、京都大学に60余の図書室があるのもうなづけるが、今日のように学問が学際的になってくると、なるべく大きな単位の図書室の方がよいというのが一般的な考え方であろう。

医学・生物学図書館、自然科学・工学図書館、人文・社会科学系図書館といった単位の方が総合的な利用に便利であるし、また人員不足の図書館司書の過重な仕事が少しでも緩和されるだろう。



京都大学のほとんどの図書は、原則的にはその時の研究者の関心によって購入されており、学問全体の立場からバランスのよい選書が行われているわけではない。図書館は全体として1つのバランスのとれた知識の体系という観点から情報を集める必要があるが、そういった点からは京都大学の図書館もかならずしも満足のゆくものではない。

たとえば図書館は図書や雑誌のほかに各種の資料を収集することが大切であるが、日本の場合、その重要性は一部の人にしか認識されず、この方面にお金を使わず、したがって資料収集の専門家もほとんどいないというのが実状である。京都大学の場合にも図書館としてそのような努力はほとんどなされていないと言わざ

るをえないだろう。資料こそ学問の出発点であり、研究のための材料であり、書物を書くための基礎を与えるのである。

京都大学の図書館は研究図書館としてはまずまずのものであろうが、学生のための学習図書館という観点からは全く不十分であると言わざるをえない。総合人間学部図書館と附属図書館の一部が主としてその役割りを担っているが、教養教育や学部教育のカリキュラムに対応した図書が十分に備えられているとは言えないし、毎年新しく出る教科書や参考図書、一般教養書などを十分に備えるだけの予算がない。また図書館の閲覧機の数が十分でなく、今日必要とされるコンピュータネットワークのコンセントもわずかしが設けられていないという状態である。

日本の大学の図書館は、欧米をはじめその他の国の大学の場合のように学生に利用されていない。京都大学附属図書館への学生入館者は非常に多いが、その多くは自分の勉強の座席をとるためにやってくるのであって、図書や資料を利用するための学生は限られている。

それは日本の大学の講義の内容、学生の学び方が図書館を利用することを考えて組み立てられていないからである。講義の参考書はいろいろと示してはあっても、それらを読ませて報告書を書かせるといったことが積極的に行われないう。自分の出席している講義のいろんなテーマについて資料をしらべて自分の考え方を形成し、それを論文や報告書の形にまとめて提出するといった形の、いわば学生が能動的に講義に参加するタイプのクラスを徐々にふやしてゆく努力が必要であろう。

こういった図書館利用の学習は、将来はインターネットや電子図書館利用という方向に変わってゆくだろう。学生は自宅からいつでも自由に

図書館やインターネット上の情報が使えるようになるという環境変化を視野に入れた図書館サービスと講義の組み立て方をこれから工夫してゆく必要がある。いずれにしても、学生が主体性をもって能動的に講義に参加し、主体的に勉強するための1つの重要な核としての大学図書館でありたいものである。

今日、情報爆発という言葉がよく用いられるようになってきているが、情報はもはや1カ所で集中的に収集し蓄積することは不可能である。情報の発生源に最も近い所で収集蓄積し、相互利用するという形の分散共有のシステムを構築してゆく以外に方法はない。したがって、図書館間の連携は国立国会図書館はもちろんのこと、公共図書館、私立図書館など、大学図書館だけといった境界をもうけずに相互協力をしてゆく必要があるだろう。

同じことは海外の図書館との連携についても言えることである。全ての大学図書館は電子カタログ情報(OPAC)をインターネットに公開し、大学人には自由なアクセスを許すということに国際的に同意すべきであろう。そして原資料へのアクセスについては大学間で個別の協定を結ぶとか、英国図書館の貸出し部門が行っているように適当な料金を支払うことによって実現することが考えられる。いずれにしても、これからは国際的な協力という方向への積極的な努力が必要で、図書館員は研究者と他大学の図書館との間の橋わたし役という大切な仕事をする必要があるのである。

京都大学図書館が学生・研究者にとって頼りがいのある、大学の中心的な機関として、より一層の発展をしていっていただくことを期待して、百周年のお祝いの言葉とします。

(ながお まこと)